



2018年度日本語教育学会 各賞受賞者・受賞論文

理念体系の策定過程における事業再編で、学会の表彰事業を所掌する表彰委員会が設置されました。学会の「事業の3本柱」である学術研究・教育実践・情報交流の促進という事業方針を念頭において、各賞の位置づけや選考基準が明確になりました。新制度における各賞の表彰の対象者及び選考基準は、以下のとおりです。

学会賞：日本語教育に関してめざましい業績・成果があり、今後も活躍が期待される学会の個人会員に贈られます。

奨励賞：日本語教育に関して注目すべき業績・成果があり、将来の活躍が期待される学会の個人会員に贈られます。

功労賞：日本語教育界において長年の業績があり多大な貢献をした個人または団体に贈られます。

『日本語教育』論文賞：各年度、学会誌『日本語教育』に掲載された研究論文、調査報告、実践報告のうち、特に優れていると認められた論文に贈られます。

学会活動貢献賞：日本語教育学会の学会活動に貢献した個人を表彰することを目的とし、隔年で対象を変えて表彰します。今年度は、学会の役員・代議員・評議員・委員として一定の年数を歴任した学会の個人会員に贈られました。今年度は、学会誌『日本語教育』の論文査読において、協力者として10年以上在任し、一定の件数の査読に尽力のあった学会の個人会員贈られます。

各賞の選考過程

①学会賞・奨励賞・功労賞は、理事・監事・代議員・委員会委員の推薦を受けた候補、②論文賞は、学会誌委員会に置かれた候補論文選考部会の推薦を受けた候補論文、③学会活動貢献賞は、客観的なデータに基づき、表彰委員会の推薦を受けた候補が、会長・理事・代議員・各常置委員会委員より構成される授賞候補選考委員会に提出されました。授賞候補選考委員会の最終選考の審議を経て、理事会で最終的に決定しました。

2018年度の各賞の受賞者・受賞論文及びその授賞理由を、次ページよりご紹介します。

受賞者の皆様、おめでとうございます。益々のご活躍をお祈りいたします。

2018年度日本語教育学会 学会賞

受賞者 伊東 祐郎氏

【授賞理由】

伊東祐郎氏は、長年にわたり、応用言語学および日本語教育学の幅広い分野で活躍し、さまざまな現場に関わっていらっしゃいました。特に、日本語の評価、テストに関し、顕著な研究成果を収め、日本語テストの開発、外国人児童生徒の言語能力測定、口頭能力試験の開発などに大きな貢献をされています。

伊東氏は、最近のものに限っても、研究代表者として「JSL 対話型アセスメント DLA の精緻化と外国人児童生徒のための教育的枠組みの構築」(2016-2020 年度, 科学研究費基盤研究 (B)), 研究分担者として「JOPT の拡充と普及: 汎用性と実用性に富む日本語口頭能力試験の実現」(2017-2020 年度, 科学研究費基盤研究 (A)), 「コンピュータ適応型ビジネス日本語テストの開発と妥当性の検証」(2015-2018 年度, 科学研究費基盤研究 (B)), 「アカデミック日本語能力到達基準の策定とその妥当性の検証」(2014-2016 年度, 科学研究費基盤研究 (B)), 「コンピュータ自動採点日本語スピーキングテストの実用化と妥当性の検証」(2014-2016 年度, 科学研究費基盤研究 (A)), 「外国人児童生徒の学習支援ための「対話型日本語能力測定方法」の検証を目指して」(2013-2015 年度, 科学研究費基盤研究 (C)) など、数々の先駆的な大規模研究において、評価・テストにかかわる多種多様なデータの収集・分析・検証, 新システムの研究と開発に携わり、当該分野の研究を強く牽引してこられました。しかも、そうした研究成果を研究者集団の共有物に留めることなく、評価・テストに関する国内外での講演・セミナーなどを通して、日本語教育に携わる現場教師の知識・技能の向上, 一般市民の啓蒙にも注力されています。それは、単著『日本語教師のためのテスト作成マニュアル』(アルク, 2008 年) という実践的なご著書にも結実しています。

また、国が日本語教育の基盤づくりに動きつつあるこの時期において、各方面とのネットワーク作りにご尽力され、日本語教育の社会的認知の向上に努めていらっしゃいます。文化庁の文化審議会委員, 同国語分科会および日本語教育小委員会の委員を務められ、近年は国語分科会・日本語小委員会の主査として『日本語教育人材の養成・研修の在り方について (報告, 2018 年 3 月)』の取りまとめの任を果たされました。

日本語教育の研究および現場, 言語政策にもたらしたこれらの功績をたたえとともに、今後のさらなるご活躍に期待し、伊東氏に日本語教育学会賞を贈ります。

以上

2018年度日本語教育学会 奨励賞

受賞者 田中 祐輔 氏

【授賞理由】

田中祐輔氏は、2009年3月に早稲田大学大学院を、日本語教育研究科修士課程を修了されました。田中氏は研究の軸足を中国の日本語教育史や教科書分析に置き、公刊された博士論文『現代中国の日本語教育史—大学専攻教育と教科書をめぐって—』（国書刊行会、2015年）で、2016年6月公益財団法人大平正芳記念財団から第32回大平正芳記念賞特別賞を受賞されています。

田中氏の業績に関して特筆すべきことは、論文の生産性が極めて高いことです。代表的な査読付きの雑誌を挙げるだけでも、単著「中国における日本語教育論議の現代史—学術誌『日語学習と研究』（1979～2012）の分析から—」（『日本語教育』156号、2013年）、単著「中国の大学専攻日本語教科書に見られる日本の小・中・高等学校国語教科書との近似性の実態—掲載作品の様式・年代・題材の計量分析から—」（『計量国語学』28巻8号、2013年）、単著「中国の大学専攻日本語教育における「国語教育」—教育委員会中国日本語教師派遣事業から見る国語科教論の教育実践と求められた役割—」（『国語科教育』74巻、2013年）などがあり、その他の雑誌を含め、たいへん多くの論文を発表されています。中国語による論文発表も積極的に行っておられ、まさに、日中をまたにかけて活躍する研究者です。

商業出版論文集に目を向けると、吉岡英幸・本田弘之編『日本語教材研究の視点—新しい教材研究論の確立をめざして—』（くろしお出版、2016年）、川上郁雄編『公共日本語教育学—社会をつくる日本語教育—』（くろしお出版、2017年）掲載の論考や、「現場に役立つ日本語教育研究」シリーズ（くろしお出版）の1巻、2巻、6巻の論文（順に「初級総合教科書からみた文法シラバス」2015年、「初級総合教科書から見た語彙シラバス」2016年、「語彙に着目した日本語教科書作成プロセスの歩み」2018年）など、論文集の編者各位から厚い信頼を得ていらっしゃいます。

論文・著作執筆以外の仕事も積極的に関わっておられます。学会活動では、本学会でのご活躍のみならず、多くの学会及び研究会に所属し、活動内容が非常に多岐にわたっていることがわかります。各会で大事な仕事を担当なさっているのですが、例えば、会計担当の日本語教育史研究会においては、若手の中心人物として会の運営を支えています。毎日の授業内容についても評価が高く、非常勤先の早稲田大学で2017年度秋学期には、早稲田大学ティーチングアワード総長賞を受賞されています。

このようなめざましい実績を評価するとともに、今後のさらなる活躍を期待し、田中氏に日本語教育学会奨励賞を贈ります。

以上

2018年度日本語教育学会 功労賞

受賞者 門倉 正美氏

【授賞理由】

門倉正美氏は、これまで留学生の日本語教育、日本事情教育、アカデミック・ジャパニーズ、メディアリテラシー等日本語教育における様々な分野で先駆的な活動を推進され、日本語教育の発展に大きな貢献をなさいました。また2009年から2013年までは副会長として当学会を牽引してこられました。

日本事情教育においては、まだ日本語教育の中で日本事情教育の分野が確立されていない時代において、日本事情教育を一分野として立ち上げていくことに尽力されました。また日本語教育におけるメディアリテラシー教育にも尽力され、その成果は単著「メディアを思考（志向・試行）する—日本事情としてのメディアリテラシー」『21世紀の「日本事情」』（くろしお出版、2001年）等に発表されています。

アカデミック・ジャパニーズにおいては、テーマ領域別研究会の活躍をはじめとし、共著『アカデミック・ジャパニーズの挑戦』（ひつじ書房、2006年）を出されるなど、この分野の発展に大きく貢献されました。

さらに、日本語教育振興法のワーキンググループにおいても中心的な役割を担われ、その議論は共著『日本語教育でつくる社会—私たちの見取り図』（日本語教育政策マスタープラン研究会、2010年、ココ出版）として刊行されています。

門倉氏はこの他にも、共著『日本語力をつける文章読本』（東京大学出版会、2012年）、共著『会話のほんご』（The Japan Times、2007年）等、日本語教育のテキスト等の執筆も幅広くされています。

門倉氏は、1）多くの方たちと協働しながら、日本語教育においてさまざまな新たな視点や分野を開拓してきていること、2）次世代の時代を見据えた活動を行ってきていること、3）日本語教育の現場だけではなく社会へのインパクトも含めた幅広い活動を行ってきていること、これらの点で特に優れたご活躍を長年にわたりなさっています。

門倉氏のご功績を称え、ここに日本語教育学会功労賞を贈ります。

以上

2018 年度 『日本語教育』 論文賞 受賞論文

「心の拠り所」としての日本語

—香港人青少年学習者による日本語学習のエスノグラフィー—〔研究論文〕

掲載号：『日本語教育』169号（2018年4月発行），pp. 1-15

執筆者：野村和之氏（香港中文大学）・望月貴子氏（香港浸会大学）

【授賞理由】

本論文は、点数至上主義の競争文化を持つ香港において、青少年がどのように日本語を学んでいるかをエスノグラフィーの手法により分析したものである。「日本語を学ぶ」ということが、抑圧的文化を相対化しうる「対抗的アイデンティティ」構築の要因となっていること、一方で日本語学習者同士のコミュニティの中にも、文化的知識・新情報の入手速度などをめぐる競争意識が見られ、抑圧的文化から完全に自由ではいられないこと、などを極めて説得力のある筆致で活写している。

(1) 日本語教育現場に対する示唆が具体的である。

日本語教育とは、単に言語形式の習得支援のみを事とするだけでなく、「心の拠り所」、つまり自らのアイデンティティを支える場として機能し得ることを示すとともに、指導者には「社会文化的文脈を理解しつつ学習者一人ひとりのアイデンティティを尊重する姿勢」を求めている。「すぐに役立つ示唆」を求めがちな日本語教育関係者に対し、「教育にとって本質的な示唆とは何か」についての根源的な問い直しを迫っている。

(2) 新しいテーマにチャレンジしている。

本論文は、限られた紙幅の中で極めてセンスよく発言内容やエピソードを抽出・提示しており、香港の青少年の状況や思いが手に取るように読み取れる。本論文は、日本語教育の文脈でエスノグラフィー研究を行う際の好モデルとなり得ている。

(3) 専門領域を超えて訴えるものがある。

本論文で得られた知見を、香港という環境における特殊事例としてのみ捉えるのではなく、より普遍的な文脈における転移可能性についても今後の課題として視野に入れている。さらに、ひとがいかにして「心の拠り所」を得ていくことができるかということは、日本語教育のみならず、教育・福祉・医療等、人間に関わる研究分野に等しく関わるテーマであり、この論文の訴えが届けられるべき先は極めて広い。

以上

受賞論文 要旨

「心の拠り所」としての日本語

—香港人青少年学習者による日本語学習のエスノグラフィー—

点数至上主義の競争文化で学歴が社会的威信に直結する香港では、学校が強い影響力を持ち、学校での競争で優位に立てない青少年は抑圧や劣等感に晒される。本稿はエスノグラフィーの手法で香港人青少年の日本語学習を社会文化的文脈に絡めて分析し、青少年学習者にとって、日本語学習が学校での抑圧から逃れるための「心の拠り所」(safe house)として機能していることを明らかにする。香港において日本語は大学入学資格試験の選択科目になるなど十分な威信を持ち、学校内外での日本語学習は青少年が学校からの抑圧への「対抗的アイデンティティ」(subversive identity)を構築する基盤となっている。その反面、心の拠り所となるはずの日本語学習も香港の競争文化と無縁ではない。香港で広く普及するSNSを媒介した青少年学習者同士の繋がりの中にも、言語能力・文化的知識・新情報の入手速度などをめぐり、学校での競争と共通した優越感と劣等感のせめぎ合いが存在している。

Japanese as “Safe Houses”:

An Ethnography of Adolescent Learners of Japanese in Hong Kong

NOMURA Kazuyuki and MOCHIZUKI Takako

Hong Kong is characterized by a grade-oriented, highly competitive educational culture and a direct link between academic credentials and social status. Schools in Hong Kong have an enormous impact on adolescents' lives, and those who cannot claim supremacy over their peers are subjected to powerful pressure and a sense of inferiority. This ethnographic study thus analyzes adolescent learners of Japanese in relation to Hong Kong's sociocultural contexts. It is shown that learning Japanese functions as pedagogical safe houses in which adolescent learners can take shelter from the pressure of their school lives. Japanese is an elective subject in the university entrance examination and has attained the status of a prestigious language in Hong Kong. Consequently, Japanese allows those adolescent learners to adopt subversive identities to escape from pressure. Even so, learning Japanese is not unrelated to Hong Kong's mainstream competitive educational culture. Through SNSs, adolescent learners of Japanese tend to vie with each other for language proficiency, cultural knowledge, and speed of obtaining new information.

(NOMURA: The Chinese University of Hong Kong, MOCHIZUKI: Hong Kong Baptist University)

2018年度日本語教育学会 学会活動貢献賞

受賞者一覧 (50音順)

【授賞対象】

2018年度は、学会誌『日本語教育』の論文査読において、協力員として10年以上在任し、一定の件数の査読に尽力のあった学会の個人会員の皆さまに、学会活動貢献賞を贈ります。

嶋田 和子 氏

BACKHOUSE Anthony 氏

三牧 陽子 氏

以上